漱石山房の秋

芥川龍之介

夜寒(よさむ)の細い往来(わうらい)を爪先上(つまさきあが)りに上(あが)つて行(ゆ)くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電灯がともつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは、殆(ほとん)ど有無(うむ)さへも判然しない。門をくぐると砂利(じやり)が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々(ふんぷん)として乱れてゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄関へ来ると、これも亦(また)古ぼけた格子戸(かうしど)の外(ほか)は、壁と云はず壁板(したみ)と云はず、悉(ことごと)く蔦(つた)に蔽はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴(ベル)の鈕(ボタン)を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴(ベル)を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪(そくはつ)に結(ゆ)つた女中が一人(ひとり)、す

ぐに格子戸の掛け金を外してくれる。玄関の東側には廊下があり、その廊下の欄干の外には、冬を知らない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸を洩れる電灯の光も、今は其処までは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先に吊した風鐸の影も、反つて濃くなつた宵闇の中に隠されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ残つてゐる。が、十畳の座敷には、赤い五羽鶴の毯が敷いてあるから、畳の古びだけは分明ではない。この客

間の西側（玄関寄り）には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帯びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黄色に百合のやうな花を繍つたのは、津田青楓氏か何かの図案らしい。この唐紙の左右の壁際には、余り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鉄格子の西洋窓の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立てが、紙絹の類や法帖と一しよに、存外行儀よく並べてある。その窓を剰した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆ど軸の挂かつてゐなかつた事がない。

蔵沢の墨竹が黄興の「文章千古事」と挨拶をしてゐる事もある。木庵の「花開万国春」が呉昌蹟の木蓮と鉢合せをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書画は独りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曽太郎の油絵の風景画が、東側の壁には斎藤与里氏の油絵の艸花が、さうして又北側の壁には明月禅師の無絃琴と云ふ艸書の横物が、いづれも額になつて挂かつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅もどきが、或は青磁に菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更

に次の間（ま）へ転じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙（からかみ）も何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯此処（ここ）は板敷で、中央に拡げた方一間（はういつけん）あまりの古絨毯（ふるじゆうたん）の外（ほか）には、一枚の畳も敷いてはない。さうして東と北の二方（にほう）の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床（ゆか）の上へ積んである数（かず）も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖（はふでふ）だの画集だのが雑然と堆（うづたか）く盛（も）り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手（はで）なるべき

赤い色が僅（わづか）ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さい紫檀（したん）の机があつて、その又机の向うには座蒲団が二枚重ねてある。銅印（どういん）が一つ、石印（せきいん）が二（ふた）つ三（み）つ、ペン皿に代へた竹の茶箕（ちやき）、その中の万年筆、それから玉（ぎよく）の文鎮（ぶんちん）を置いた一綴りの原稿用紙——机の上にはこの外（ほか）に老眼鏡（ろうがんきやう）が載せてある事も珍しくない。その真上（まうえ）には電灯が煌々（くわうくわう）と光を放つてゐる。傍（かたはら）には瀬戸火鉢（せとひばち）の鉄瓶が虫の啼くやうに沸（たぎ）つてゐる。もし夜寒（よさむ）が甚しければ、少し離れた瓦斯煖炉（ガスだんろ）にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後（うしろ）、二枚重ねた座蒲団の上には、何処（どこ）か獅子（しし）を想はせる、脊の低い半白（はんぱく）

の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を翻したりしながら、端然と独り坐つてゐる。……

漱石山房の秋の夜は、かう云ふ蕭條たるものであつた。

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社
１９６５（昭和40）年12月20日発行
※底本の「軒光（のきさき）」「殆（ほと）ど」「飜（ひるが）したり」はそれぞれ、「軒先（のきさき）」「殆（ほとん）ど」「飜（ひるがえ）したり」にあらためました。
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月26日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。